

心理学における動機づけ概念の起源と発展 (1)

— 感情心理学における動機づけ — (注1)

大 芦 治

千葉大学・教育学部

The origin and the development of the concept of “Motivation” in psychology (1):
Concepts of emotion and motivation in the historical perspective.

OASHI Osamu

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、心理学における動機づけ概念の起源とその発展について論じる一連の論文の最初に位置づけられるものである。まず、今回は、心理学において動機づけ概念が登場したのがおよそ100年ほど前であり、それ以前、動機づけに相当する心理的、行動的現象は感情研究の中で行われて来たことを確認した。そして、Gardinerら(1937)の「感情心理学史」をもとに古代から近代までの感情の研究の歴史を概観し、そのなかで動機づけに相当する現象がどのように扱われてきたかについて検討した。さらに、近代に至り感情概念が縮小され、そこから動機づけ概念が登場することになった経緯について言及した。

キーワード：動機づけ (motivation) 感情 (emotion) 歴史 (history)

1 はじめに

著者は、今後、数回にわたって心理学における動機づけ概念の起源と歴史的発展について論じてゆく予定だが、本稿はその初回にあたる。

心理学において動機づけは、ふつう、ある行動を生起させ、維持させる一連のプロセスをさすが、そこには大きく分けて2つの意味が含まれている。一つは、ある行動を生起させることになった理由を示す場合で、その意味するところは動機 (motive) に近い。もう一つは、一般に人や動物を行動に駆り立てるためのメタファーとしての力、エネルギーを指すもので、こちらは、教育心理学領域などでは、意欲、やる気などという言葉を用いて説明することが多い。このように2つの視点の異なる意味を含むことから想像がつくと思うが、動機づけという概念は必ずしもはじめから自明のものとして確立されていたわけでも、また、ある時点で誰かによって提案されずんなりと受け入れられたわけでもない。

動機づけという用語が心理学関係の文献に登場するのは、1910年代からである^(注2)。その歴史は100年を少し超えた程度で、心理学の他の用語と比べてもそれほど古いものではない。ご存じのようにW.M. Wundt(1832-1920)が心理学を大学の公式のカリキュラムに取り入れたのが1879年で、ふつうこの年号をもって近代心理学ははじまるとされる。だから、動機づけという概念は近代心理学の成立から30年ほどたって生まれたものである。

ただ、広い意味での動機づけに関連した概念が、それ

以前には全くなかったかというそうではない。そもそも、Danziger(1997)の指摘するように、動機づけやパーソナリティ、知能、感情といった今日の心理学で当然のものとして受け入れられている心理学的カテゴリーも、実は、絶対的な実在の根拠をもっているわけではなく、歴史を通してさまざまな社会的、文化的な要因、そして、ときには偶発的な要因の影響を受けながら形成されたものに過ぎない。ということは、1910年代に動機づけ概念が成立したのもその時点で何らかの社会的、文化的な(あるいは、偶発的な)背景があったからであり、また、動機づけ概念が成立する以前にも、今日、我々が漠然と動機づけというカテゴリーに属するとみなしている心理的、行動的な現象が別のカテゴリーの中で扱われていたとみる方が自然であろう。だから、動機づけ概念の歴史を描くにあたって1910年代の動機づけ概念の誕生から始めれば事足りる訳ではなく、それ以前にあった心理学的なカテゴリーの中に含まれる動機づけ的な側面の歴史にも着目する必要があるのである。

さて、動機づけ概念の確立以前から、動機づけ的な側面を含む心理学的なカテゴリーとしての役割を担ってきたものは何だろうか。著者は、そのもっとも有力なものとして感情(情動、情念、情緒)を考えている。

感情は、今日でも、動機づけと密接なかかわりがあるものとされている。

たとえば、動機づけを行動主義的な枠組みの中で理解する場合、生活体に何らかの生理的(あるいは認知的な)欠乏状態があり、その欠乏状態を解消するという目標に対し何がしかの行動が生起、維持されるという一連のプロセスが仮定されている。このプロセスでは、まず、生活体は欠乏状態にあるわけだが、そこにはたいていの場合、不快という感情がある。また、目標が達成されたとき

連絡先著者：大芦 治 oashi@faculty.chiba-u.jp

Corresponding Author :

OASHI Osamu oashi@faculty.chiba-u.jp

生活体には満足感といわれるような快感情が生じている。

より認知心理学的な色彩の強い達成動機づけの研究においても、達成に伴い生起する誇り (pride) や恥 (shame) という感情が重視されている (Atkinson, 1964) ことはよく知られたことである。

このように動機づけといわれる一連のプロセスは、今日でも感情と密接な関係にあることがわかる。

そこで今回は、この感情の概念について可能な限り遡ってみてゆく。具体的には、ギリシア時代から近代心理学成立前後までの感情研究の歴史について Gardiner, Metcalf, and Beebe=Center (1937) の著書^(註3)を手掛かりにたどってゆきたい。そして、そこで取り上げられている感情研究の中で、近代心理学成立以降に確立された動機づけというカテゴリーに含められる心理的、行動的な現象がどのように扱われてきたかについて検討を加えてゆきたい。

2 古代から中世の感情概念

Gardinerら (1937) によれば、ギリシア時代の感情論は、まず、第一に、快苦説をその中心に据えているという。たとえば、Platoは快苦を道徳との関連から考えている。その快苦説は、細部に異同はあるものの、快楽は善で苦は悪であるという立場をとっている (p. 24)^(註4)。また、Platoは快楽を純粹快楽、混合快楽、真快楽、偽快楽に分類している (p. 28-30)。Aristotelēsも快苦について述べているが、その主張はPlatoとは多少異なる。それによれば快楽は生物の自然的な能力、可能性の正常な実現に伴うものであり、そのような実現が阻止される場合には苦が生ずるといふ (p. 37-38)。AristotelēsもPlatoのように快楽の種類を考えているが、それは、聞くこと、見ること、思い出すこと、考えることといったそれぞれの異なった能力が実現される中で生じる違いをさしているようである (p. 41)。

もちろん、PlatoやAristotelēsの感情に関する言及は、快苦説に関わるものだけではない。Platoは心的機能を「理性」「気概」「欲望」に3分割して考えたことはよく知られているが、このうち「気概」と「欲望」が情緒的興奮に関連する部分とされ、前者は勇気と熱情と愛などを後者は肉体的な欲望などをそれぞれつかさどる部分とされた。そして、この「気概」と「欲望」という二分法は、のちの中世の感情論に引き継がれていった (p. 32)。

Aristotelēsも感情についてかなり多くのものを書き残している。Gardinerら (1937) によれば、Aristotelēsは「精神的事実」を感情と能力と習慣に三分している。そして、感情とは欲望、怒り、恐れ、安心、羨望、喜び、愛、憎しみ、憧れ、競争心、あわれみなど快苦を伴う状態をさしているという (p. 46)。そこでは、快苦説をとりながらも今日にもつながるような感情の分類が行われていることがわかる。なお、アリストレスの著作において感情はpathn (πάθος) と表記されているが、訳者の矢田部によれば、これがのちにaffectusやpassioと訳されるようになったそうである (p. 90)。

以上のようなPlato, Aristotelēsの感情概念の中に現在の動機づけ概念と対応するものを特定することは容易

ではない。ただ、快苦や欲望といった概念の中に、動機づけの要素が含まれていると考えられるのではないだろうか。なかでも、Platoの「気概」の概念や、快楽を生物の自然的な能力、可能性の正常な実現に伴うものとみるAristotelēsの考え方には、達成動機づけや自己実現といった今日の動機づけ研究のキーワードを連想させるようなところがある。

さて、PlatoやAristotelēsにつづく古代末期において多くの感情に関する文献を残したのは、ストア派の哲学者たちである。ただ、彼らの感情論は、PlatoやAristotelēsのそれとは多少趣を異にしていた。ストア派において、感情は一般的には精神の擾乱であり、過激な威圧的な衝動であると定義づけられ、また、このような運動ないし過程は反理性的なものとされた (p. 63)。Gardinerら (1937) によれば、ストア派では理性と自然は本来一つのものでいずれも過激を許さないものとされており、そのため、感情はそれに対する反理性的、反自然的なものとされたのである (p. 64)。また、感情は身体の病気と同じように精神の病気であるとされた (p. 65)。なお、ストア派の感情論を無理に動機づけの枠組みで理解する必要はないのだろうが、あえていえば、Freudの理論に通じるものを感じる。

さらに、中世に入るとAugustinusが感情について、これまでとは異なった議論をしている。それは感情の根源はすべて意志にあるというものである。たとえば、欲望や喜びは我々が欲するものに同意する意志であり、恐れと悲しみは我々が欲しないものを拒否する意志にほかならないという (p. 89-90)。

一方で、このAugustinusなどに代表される中世の哲学者の間では、Plato哲学とキリスト教の教義を融合させようという流れが強くなる。そのため、Platoの精神の3分割論が引き継がれ、精神を理性的、怒りの、欲望的の3つの部分に分けることが広く行われた (p. 91)。

こうした分類は中世の末期まで続き、Bonaventura (1221-1274) は、精神を認識能力 (vis cognitiva) と感情能力 (vis affectiva) とに分け、さらに後者を欲望的 (concupiscibilis) と怒りの (irascibilis) に分けている。欲望的と怒りのの区別は前者が快楽に後者が感性に関係するとされ、両者がある種の理性的能力と結合するとそこに意志 (voluntas) が生ずるとも述べている (p. 92)。

Thomas Aquinas (1225-1274) の感情 (passio) の分類 (図1) もこれと概ね似たものである。彼は、感情



図1 トマスの感情分類
Gardinerら (1937) p. 99の図をもとに作成

を欲望的欲求 (appetitus concupiscibilis) と怒りの欲求 (appetitus irascibilis) に分け、前者はそれ自身が快苦に向けられ、後者は欲求の満足を困難になるような状況における性質に関連付けられるとした (p. 98)。

Gardierらは、この以外にもいくつかの感情説を紹介しているが、ここではそれらの詳細に立ち入らない。ただ、とにかく、Gardierらが中世の感情論を紹介する中で主張したことは比較的単純である。それは、中世において多くの論者は、感情 (passio) を欲求傾向の変化とほぼ同一のものとみなすことが一般的であった、ということである (p. 94)。

しかし、動機づけ概念との関連で考えるとき、もう一つ着目しておくべきことがある。それは、古代の感情論にはなかった意志 (voluntas) の概念が登場してきたことである。この意志の概念は、信仰の基盤になる自由意志にも通じるものであり、中世という時代に生まれるべくして出現したものと見えるだろう。ただ、前述のようにBonaventuraが感情とある種の理性的能力との結合によって意志が生ずると述べていたことからわかるように、意志は完全に独立したカテゴリーとして確立していたわけではない。意志が独立した心理学的なカテゴリーとなるのは、おそらくは、後述する近世の能力心理学における知・情・意の三分説の成立を待つ必要があったのである。

3 ルネッサンスから近世にかけての感情概念

ルネッサンス期の感情学説についてGardierらの著書は必ずしも体系立てた記述になっていないが、以下の2点は注意をしておいてよいだろう。まず、それまで感情を表す言葉として一般的であったpassionesは次第に用いられなくなりaffectusやaffectionesにとって代わったことがある (ただ、passionesという用語はまもなくDescartesによって復活を遂げる) (p. 112)。つぎに、これまで感情の分類の基本とされてきた欲望的と怒りの区別を捨てたことである。

さて、R. Descartes (1596-1650) についてみてゆこう。Descartesの感情に関する著作はいうまでもなく「情念論 (Les passions de l'ame)」である。ここでは、まず、受動と能動という用語の意味が重要になってくる。受動 (passion) とは広い意味で精神がその主体となっているすべての新しい経験のことである。一方、能動とは精神が経験の主体であるばかりでなく同時にその原因にもなっている、つまり、意志の直接、間接の働きを受ける場合を指す (p. 137)。この定義からもわかるように受動にはかなり広い範囲のものが含まれており、いわゆる感情のほか、外界の知覚によるものや身体的な感覚、欲求などの知覚によるものも含まれている。このうち、いわゆる感情は情念 (passion)^(注5) とよばれ、もっぱら精神に関連付けられるもので喜び、怒り、その他同種の感覚であるとされた (「情念論」第1部、23-25)^(注6)。

二元論者であったDescartesは、外界、あるいは、身体内部の感覚器に生じた感覚を精神がどのように経験するかについて、いわゆる、松果腺 (pineal gland) 仮説を用いて説明したことで知られる。感覚器で知覚さ

れた刺激は神経を経て脳に伝えられるが、Descartesは、神経は細い管のようになっていて、そこは動物精気 (esprits animaux) といわれるもので満たされていると考えていた。動物精気 (または、精神精気) とは、古代ローマのGalen (c.a.129-c.a.200) の医学の体系から受け継がれたもので心臓の熱によって生ずる一種の気である。Descartesは、感覚器の変化はこの動物精気の変化として脳室に伝えられ、その動きによって脳室内にある松果腺が振動することで精神が刺激を経験すると考えていた。一方、精神の意志により身体を動かすときなどは意志が松果腺を振動させ動物精気を変化させ、それが抹消に伝わるとされた。以上が松果腺仮説の概略である。ただし、情念の場合は、感覚器の刺激による動物精気の変化を経験するものでもないし、また、精神そのものに由来する意志によって松果腺が動かされそれを経験するわけでもない。そこで、Descartesは、情念は (偶然を含む) その理由が知られていない精神由来の動物精気の運動によって起こるものと主張した (「情念論」第1部、29)。たとえば、猛獣を知覚した場合、感覚器から神経を伝わった通常の動物精気の変化が松果腺から精神に伝えられる。しかし、その猛獣が過去経験で有害なものに分かっていた場合、動物精気の変化の一部が逃げるために足を動かす神経や心臓の動きに変化を与える神経に伝わる。心臓の変化は血液が心臓で動物精気を発生させることにも影響し、こうした、動物精気そのものの変化が、体質なども関連しながら、恐怖の情念を生じさせるというのである。このようなことをまとめてDescartesは、情念は精気のある特殊な運動によって生ずる、と述べている (「情念論」第1部、35-37)。こうした例からもわかるように、Descartesは情念を、生命維持に適応した働きをするもので自然がわたしたちに有用だと定めたもの、としている (p. 145, 「情念論」第2部、52)。そして、Descartesは基本的な情念として、驚き、愛、憎しみ、欲望、喜び、悲しみの6つがあると指摘している (「情念論」第2部、69)。

以上が、Descartesの感情説の概略である。情念の機能について後年の進化論的な感情理論との類似を思わせるような考察をしている点など興味深いのが、Descartesはそれ以上考察していない。また、欲望的感情と怒りの感情という二分法を捨てたものの、6つの基本的な情念のなかに欲望が含まれている点も、中世以来の伝統から抜け切れていない。

Gardierらは、Descartesに続いてHobbesの感情論について論じている。

T. Hobbes (1588-1679) は、政治学をその主たる関心対象にしていたが、そのために市民社会の構成員である人間性を理解することの必要性を感じていたという (p. 162)。Hobbesは感情 (passion) を人間性理解の手掛かりとした。そして、思考、意志、行動といったものを方向付け、形作るのはいずれも感情にあるとした (p. 163)。彼は、感情を欲求 (appetite)、欲望 (desire)、愛、嫌忌、喜び、悲しみに分類しているが、Gardierらはこの分類について「スコラ派の欲望的感情の名残を強くとどめて」おり、また、Descartesの分類と類似していると指摘している (p. 165)。さらに、Hobbesの感情

の分類について、「感情 (passion) は、中世の心理学と同じように基本的には欲求 (conation) として考えられ、後代の学説のように、感情 (feeling) の形式として考えられていない」(p. 166) とまとめている。

Hobbesに続いて大きく取り上げられたのはD. Hume (1711-1776) である。GardinerらはHumeの感情論において重要なのは感情を直接感情 (direct passion) と間接感情 (indirect passion) に分けたことであると (p. 206), 多くのページを割いている。このほか、Humeが「情緒 (emotion) と情念 (passion)」とを区別するという新しい課題に直面したことも述べている (p. 193)。これについてGardinerらは情念は対象によって引き起こされ、その対象に対する欲望を含むもの、情緒は受動的感情であって欲望を伴わないというKames卿 (1696-1782) の説明が妥当であるとしている。(なお、Humeのemotionの概念については宇津木 (2015) の論文を参照)

さて、ルネッサンスから近世にかけての代表的な感情理論としてDescartes, Hobbes, Humeの説について簡単に概観したが、それらは、少なくともGardinerらの記述に拠る限り、感情概念の中に欲望を含めるという中世以来の学説と大筋においてあまり変わらないものであったことがわかる。ただ、Humeが感情を情緒 (emotion) と情念 (passion) に分け、欲望を伴わない感情として情緒 (emotion) を独立させたことは、次に紹介する能力心理学の三分説、そして、動機づけ概念の成立を方向付ける一つのきっかけになったように思われる。

4 能力心理学と感情

18世紀になると、ドイツを中心に、精神をいくつかの基本的な機能の組み合わせとして考える「精神 “能力” 説 (p. 226)」(能力心理学 faculty psychology) が成立する。こうしたなかで「感情 (feeling) は知識 (knowing) や意志 (striving) と同じように、精神生活の独立した独自の側面であること (p. 226)」を認めようという流れが生じてくる。一方、G.W. Leibniz (1646-1716) は「悟性と意志の能力しか認めない」という立場をとるが (p. 226), こうした対立する説が感情をどのように位置づけるかという議論を生んだ。そうしたなかで、感情を、知識や認識能力、あるいは、意志のいずれにも属しないものとみなす、いわゆる知情意の三分法が次第に確立されてゆく。

感情を独立の能力とする精神能力三分説をはじめてははっきりと打ち出したのはM. Mendelssohn (1729-1786) であったようだ。彼は、1766年に「認識、感情、欲求の能力についての覚書 (Bemerkungen ueber die Erkenntnis, Empfindungs, und Begehrungsvermoegen)」を記しているが、そのなかで「感情能力 (Empfindungsvermoegen) は、認識能力と欲求能力との中間にある独立した能力であると考えられ、われわれが快く感じたり、不快に思ったり、是認したり、否認したりする能力」であると述べているという (p. 231)。そして、この三分法をより深い理解のもとに確たるものとしたのがJ.N. Tetens (1736-1807) で、1777年の著書の中で「精神能力の感情、悟

性、意志 (Taetigkeitskraft) の三分説に達」したという (p. 232-233)。

三分説に関して次に登場するのはI. Kant (1724-1804) である。Kantは、「心的能力には、知る能力、快不快を感じる能力、欲求の能力の3種がある」(p. 237) としたという。Kantの三大批判書といわれるものは、この3種の能力に対応している。つまり、「純粹理性批判」は知る能力を、「実践理性批判」は欲求の能力 (意志) を、そして、「判断力批判」は快不快を感じる能力 (感情) をそれぞれ扱っている。そして、「この三能力は、ほかのものに還元することはできない、また、共通の根源から派生することもない」(p. 237) とされた。

ここにおいて、理性 (知る能力)、感情 (快不快を感じる能力)、意志 (欲求の能力) の3つの能力ははっきりと分離された。とくに意志は、中世まで信仰との関係では理性と、逆に欲求との関係では感情と関連付けられ、その位置づけが明確ではなかったが、Kantが意志を道徳を実践する能力として独立させることに成功した点は注意しておいてよいだろう。

一方、感情についてだが、Kantは、感情を情緒 (Affekte) と情念 (Leidenschaften) に分けたという。

前者は「主体がそれを拒むか従うかを熟慮できないある状況下における快 (Lust), または、不快 (Unlust) の感情」であり、後者は、「主体の理性にはほとんどあるいはまったく統御できない傾向 (Neigung) である」とした。さらに、Kantは情念や情緒が極めて強く、理性が抑圧されそれらに屈服することを精神の病 (Krankheit des Gemuets) としたという (p. 239)。

なお、Gardinerらは、「情緒の主要な決定的要素は快不快の感情である」と考えることや情緒や情念を非合理的なものと考えている点でKantの見解は伝統的であるとも述べている (p. 239)。また、Gardinerらは、Kantは情緒と情念を持続性で分け、後者をより持続的なものとしたとも指摘している (p. 240)。情念を持続的なものとみなしていることは、そこに動機づけ的な側面が含まれているように思われる。

5 19世紀以降の感情研究

つぎに心理学が今日のような形で成立する直前、つまり、19世紀末までの感情研究についてみてゆこう。Gardinerらは19世紀の感情研究についてかなりのページを割いている。それらを大別すると抹消説と中枢説に分けられるという (p. 244)。そして、この枠組みに従い多くの学説を分類し位置付けているが、それらの殆どは今日では顧みられることもなくなっている。ここでは、そのなかの主なもののみ簡単に見てゆこう。

Gardinerらの分類は、一時点での学説を単に横断的に分類しただけではなく、その分類の提示順序自体が歴史的な発展とほぼ一致している。したがって、ここでもGardinerらの示した順序をできるだけ崩さず、歴史的な発展の理解が損なわれないように話をすすめてゆく。

まず、抹消説からみてゆこう。Gardinerらがここで最初に取り上げたのはフランスのP. Cabanis (1757-1808) である。彼の理論の基本は、大脳の機能は本質的に

は神経の末梢的興奮に依存するということにある (p. 245)。快感は「末梢神経末端の弛緩の結果であり、これがその機能を容易化する。不快感は、その緊張である機能を阻害するものである」とされた。そして、「このような弛緩緊縮は、一つの反射であると考えられた」。Gardinerらは、ここにW. Jamesのいわゆる末梢起源説の出発点があるとしている (p. 246)。

Gardinerらがつぎにとりあげているのは、連合主義者 James Mill (1773-1836) である。Millは、あらゆる意識内容は本質的には感覚に還元でき、感覚は基本的に快、苦、中性の三種に分けられるとしている。このうちとくに情緒 (affection) と関係しているのは快と苦で、これらの原因が過去にあるか未来にあるかによってそこに感覚および観念の連合が生じ、その結果、同情、喜び、望み、反感、悲しみ、恐れといった基本的な感情が定義されるという (p. 248)。この学説はCabanisのような生理学的な基礎をもつものではないが、感情を感覚に還元して考えるという意味でやはり末梢説といえよう。

つづいて同じく連合主義者の系譜に属するA. Bain (1818-1903) の情緒説が紹介されている。Bainは、意識内のあらゆる要素を感情と呼んだが、そのうち一次的感情はいわゆる感覚のことである。そして、この一次的感情には情調 (affective value)、強度と延長、特性という3つの特質がある。さらに、この一次的感情の複合(連合)が二次的感情、すなわち、情緒 (affection) であるという (p. 249)。

Bainと同時代のH. Spencer (1820-1903) の説は中枢説としての側面ももっている。Spencerは、感情は感覚からなり感覚は外部受容的なものと内部受容的、自己受容的なものに由来するとしている点では抹消説だが、これとは別に中枢的な情緒も感情を構成するとしている (p. 250)。

つぎに中枢説についてだが、Gardinerらは、中枢説についてもかなり詳細に記述している。それらは、大きく①中枢的心理精神説、②中枢的心理生理説、③上層現象説に三分できるとされる。

まず、①中枢的心理精神説であるが、前述の能力心理学の流れを汲み中枢に感情を意識する何らかの働きがあるとする立場で、イギリスのW. Hamilton (1788-1856) のほか、今日でもその名が知られている者としてはF. Brentano (1838-1917)、T. Lipps (1851-1914) などが挙げられている (p. 262-264)。また、Gardinerらは、Freudにも通じるような力動的心理学と連合主義を組み合わせた独自の心理学を提唱したことで知られるJ.F. Herbart (1776-1841) についてもここに含めている (p. 265-267)。つまり、Herbartの心理学では、観念が意識上に現れるときの交互作用から感情が説明されるとしている。

つぎの、②中枢的心理生理説であるが、ここでは、まず、骨相学が話題にされている。この中で、Gardinerらは骨相学の提唱者F.J. Gall (1758-1828) の弟子J.G. Spurtzheim (1776-1832) が主張した35の能力のうち21は感情的な能力であったことを紹介している。また、骨相学に関連しその実証を試みたフランスのP. Flourens (1794-1867) が、神経を切除する実験によって旧来の感

情の座が内蔵にあるという説を否定し、脳に感情の座があることを証明したことなども取り上げている (p. 270-271)。

Gardinerらは、さらに、Wundtの感情に対する説もこの中枢的心理生理説に含めている。一般に、Wundtの感情説は、快—不快、興奮—抑うつ、緊張—弛緩の3次元を提起したもので、感情の3次元説として知られる。この多次元説が考えられた理由は、神経興奮の放散が感情の背後にあるからという (p. 277-279)。

③上層現象説であるが、Gardinerらによれば1875年ごろから目立つようになったという。これは、意識は単なる上層現象 (epiphenomenon) であり、「因果的連関に対し附帯的意義しかもたないぜいたくな物であるという説」 (p. 280) である。

Gardinerらはこの代表的なものとして、一般にジェームズ＝ランゲ説としてまとめて扱われる理論のうち、C. Lange (1834-1900) による部分をあげている。これは、Langeが「情動の研究においては感覚は問題ではなく、身体的現象のみが科学的対象である」と明言したからであるという (p. 280)。

また、フランスのT. Ribot (1839-1916) の説についても紹介している。それによれば、感情には「客観的運動現象と主観的現象の二面が区別される」が、基本的に「感情や情緒は、心的実在ではなく、心理生理的なもので」、「その最も重要な面は客観的な面にある。意識状態としての快苦は、感情生活の基本的要素ではない」のだという (p. 283)。この説はRibotの追従者P. Hartenberg (1871-1949) などによって受け継がれ、フランスは上層現象説の中心になったといわれる (p. 285)。

以上、19世紀の感情研究についてGardinerらの記述をもとに粗描してみた。そこから分かるのは、まず、全体として抹消説から中枢説に至る流れが見られることである。Gardinerらはこれについて、はじめは「生理学が感覚器官の問題を通して心理学に侵入して」いたからであると述べているが、これは実験心理学の起源の1つが感覚生理学にあることなどを思い浮かべれば理解できるのではないかと思う。そして、「後に、生理学の知識が増大するとともに中枢的心理生理説が発達するようになる」と述べ、中枢説が有力になったことを指摘している。やがて、こうした生理学的な知見が増大するなかで、意識の相対的な位置づけが次第に低下してゆく。そのプロセスで「世紀の末葉においては上層現象説」が有力になってくるというのである (以上、この段落の引用はすべて p. 286)。

こうした学説の変遷史を追ってゆく中ではっきりしてきたこととして、次の2点があげられるのではないかと思う。

まず1点目、それは、中世以来の感情論に一貫していた感情を欲求と関連づけようとする理論が、その痕跡も含めほぼ一掃されたということだ。

また、2点目として次のようなこともいえる。すなわち、19世紀の感情研究は、意識は単なる上層現象であり因果的連関に対し附帯的意義しかもたない、とする感情の上層現象説にたどり着いたわけだが、これによって意志研究と感情研究が折り合いのつかないものになってしまっ

たということだ。つまり、上層現象説のいうように意識は身体に対して直接的な原因となりえないということならば、そこに意志的な働きを考えることは難しくなる。つまり、そもそも意識過程が身体に及ぼすプロセスそのものを扱っている意志研究と感情研究とは両立不可能になるからである。こうなると感情研究はもはや感情のみを扱う一分野として、独立して行われなくてはならなくなってしまうのである。こうして、20世紀以降今日に至る心理学の感情研究の流れが作られていったのである。

このように感情研究は意志研究、欲求研究のいずれとも袂を分かつことになった。そして、感情研究から独立した意志研究や欲求研究に関連するカテゴリーとして新たに登場することになるのが動機づけなのである。

6 理性および意志の概念の変容

さて、前述のように19世紀を通して感情研究は欲求概念を切り離し、また、意志研究との接点も失っていった。実は、このような感情研究の変容のプロセスを語るうえで、もう一つ押さえておくべき側面がある。それは、理性と意志の概念の変容についてである。

Danziger (1997) は近世以前の情念(感情)と理性、意志の3概念について、次のように述べている。

「情念の概念は何世紀ものあいだ、理性の対極の位置を占めていた。情念が情念であるのは理性との対立のおかげである」(Danziger, 1997 邦訳, 上巻, p.80) とし、非合理的な情念と対立するものとして理性の存在を重視している。さらに、「(中世までの考え方では) 理性は単なる個人の属性ではなく「理性とは個人と宇宙^(註7)のつながりである」って、「個々の人間は理性的な意志を授けられており、情念の制御を通して、宇宙の高度な秩序に自発的に参加できた」(Danziger, 1997 邦訳, 上巻, p.80)。つまり近世以前において理性は意志を通じて情念(感情)を支配するもので、しかも、その理性に対する信頼はゆるぎないものであったというのだ。

ところが、近世に至り、そうした状況に変化が生じたという。それは、ニュートンの物理学の影響で「宇宙の秩序は数学的であり機械的であるという考えが打ち立てられた」ことにあるという。そして、それによって情念(感情)を制御する理性・意志という考え方に変化が生じ、理性は神と結びつくものではなくなってきた。前述のようにKantが理性によって情念や情緒が統制できなくなった状態を精神の病と位置付けたのは、一見ストア派との類似性を感じさせるが、実は、このような理性の相対的な弱体化が背景にあったと思われる。

また、さきほどHumeについて述べた際、彼が情緒(emotion)と情念(passion)とを区別するという新しい課題に直面したことを紹介した。Danzigerによれば、このHumeの情緒と情念の区別も実はこうした理性の力の低下と関連しているのだという。つまり、理性の力の相対的低下のため、もはや理性は旧来のような欲望や持続的な動機づけの概念を含む情念(passion)を抑え込むことができなくなってしまったのである。

そこに「動機的原因と心的動揺の混合」を意味する「科学的言説としてのカテゴリーとしての情念(passion)

は終焉を迎え」情動(emotion)に取ってかわるという歴史的な展開があったというのである。Danzigerによれば、情動(emotion)は、モーションに由来し、「身体や社会の動きを表現するときに使われ」る語で「比喩的に、心の動揺や興奮に適用されこともあった」(Danziger, 1997 邦訳, 上巻, p.75) ののだという。もはや、絶対的な力を失ってしまった理性でも抑え込むことができるものとしてemotionのような新たな概念が、つくりだされる必要があったのである。

Danzigerは、さらに、こうした理性の変質が意志概念にも変化をもたらしたことを指摘している。それは、意志決定が「宇宙の神聖な秩序にあずかる」のではなく、「快と苦という私的で感覚的な体験」を通しておこなわれることになり(p.81)、その結果「意志は運動器官に心的衝動を伝達する媒介手段に還元されてしま」ったということである。さらに、Danzigerはこの決定論的な図式によって意志そのものが「余計な概念」となり、そこに「動機というカテゴリーが新たな重要性を獲得した」(Danziger, 1997 邦訳, 上巻, p.83) と述べ、動機づけ概念の起源がここに見い出せることを示唆している。前述のように意志概念はテーテンスからKantに至る流れの中で18世紀ごろになってようやく独立した心的機能として位置づけられるようになったが、こうしてみるとその意志の概念の解体は予想以上に早かったのである。

以上、Danzigerの見解から理解されるのは、19世紀の感情研究の発展のなかで感情のなかに含まれた欲求概念が取り除かれるのと並行して、感情と対峙していた理性や意志といった概念も縮小化が進行していたことである。つまり、古代、中世をとおして精神的な存在としての人のなかで大きな二極構造をつくってきた理性と感情という2つの大きな心的機能や、そして、最初はその付帯する機能として、後には、独立した第三の機能として位置づけられていた意志も、近代にいたって縮小され萎んでしまったのである。もちろん、その原因は自然科学的な世界観の成立に伴う理性の変容にあったのだが。

Danzigerは、この3つの心的機能の縮小によって、それを補うような形で生まれたカテゴリーとして動機づけを位置づけようとしたわけである。

7 むすびに代えて

今回は古代から19世紀までの感情概念の変遷を、主としてGardinerらの著書をもとに粗描し、また、併せて、動機づけ概念の成立の背景となるべく事柄について考察を加えてみた。以上の流れを大まかに図示してみたのが図2である。

さて、おしまいに今回は検討しきれなかった課題について少しだけ言及して、ひとまず、締めくくりにする。

前述のようにDanzigerは、自然科学の発達によって成立した決定論的な理性が変質しその支配下にあった意志そのものが余計な概念となり、そこに動機づけという新たなカテゴリーが生まれたと考えているように思われる。また、これと同時に欲望や動機の意味も含む情念(passion)に代わって情動(emotion)という概念が登場したことも指摘している。そして、こうした知・情・

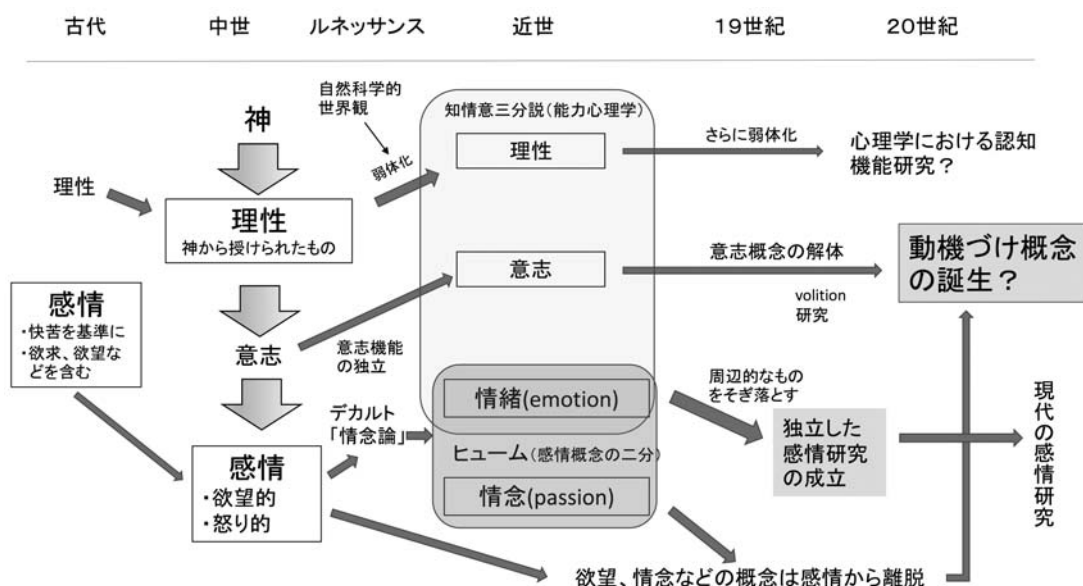


図2 感情研究の歴史と動機づけ概念の起源

意という基本的な心理的能力の概念がカバーする範囲が縮小することで動機づけという概念が誕生したという主張をしている訳だが、これについては、著者も、異論はない。

しかし、まだ検討しなくてはならないことがある。それは、こうした感情や意志の概念の縮小が起こったのは主に19世中ごろまでのできごとと思われることだ。このことは情動 (emotion) の概念を導入したHumeが18世紀の人物であることや、前述のように感情に対する意志的な働きを認めない上層現象説が (Gardinerらによれば) 1875年ごろから優勢になった (p.280) ことなどからも理解できる。一方、本稿の冒頭にも述べたように動機づけ概念が誕生したのは1910年代である。つまり、感情や意志の概念の縮小と並行して動機づけ概念が生まれたわけではなく、そこにはおそらく数十年程度のブランクがあるのである。

このブランクの間に何が起こったのか。著者は2つの側面から論じる必要があるのではないかと考えている。一つ目は、意志概念が単純に動機づけ概念と取って代わったわけではなかったということである。実は、その間に、意志 (will) と意思 (volition) という広義の意志の陣営に属する側での相克があったのである。二つ目は (このようなことはDanzigerも述べているが) 19世紀の後半は産業革命の進行、教育の普及など大きな社会的・文化的な変化があったわけだが、そうした社会的・文化的な影響も無視できないという点だ。動機づけという概念はおそらくはこうした社会的・文化的な影響も加わり、数十年程度の時間をかけて成立したのではないだろうか。

この2つの側面については、次回以降に考察してみたい。

注

- (1) 本稿は、2014年10月の日本パーソナリティ心理学会第23回大会広報委員会企画シンポジウム「感情と動機づけをめぐって」において話題提供者として発表した内容の前半部分に大幅に加筆・修正したものである。
- (2) 一般に、動機づけ概念が心理学に取り入れられ

たのはWoodworth (1918) の著書によるとされるが、ここでは動因 (drive) 概念が明確化されただけのようなのだ。実際に本文中にもmotiveという用語は散見されるが、motivationという用語は見当たらない。Danziger (1997) によれば、20世紀初頭から、「広告やセールス、産業能率、教育実践、個人の成長などに関する」文献が急増し、そのなかで「動機づけること (to motivate)」という不定詞の使用が目立つようになったという (Daniger, 1997 邦訳, 下巻, p.8)。なお、1911年にE.B. Barrettが「Motive Force And Motivation Tracks: A Research In Will Psychology」という著書を出しており、このあたりが心理学で動機づけの概念を本格的にとりあげた最初の著書なのではないかと思われる。

- (3) Gardiner, Metcalf, and Beebe=Center (1937) の著書は近代以前の感情研究について詳細にかつ体系的にまとめたもので、こうした著書は、著者の知りうる限りこれが唯一のものと思われた。したがって、本稿の記述の多くもこのGardinerらの著書に拠っている。
- (4) 以下、本稿ではページの表記についてはとくに明示のない限りGardierら (1937) の邦訳について示している。
- (5) なお、原書では情念は受動と同じpassionという用語が当てられているが、Descartesはこれ以降、passionを狭義の意味、つまり、情念として使っている (「情念論」第1部, 25)。
- (6) 本稿では「情念論」についてはすべて岩波文庫版 (谷川多佳子 (訳) 2008) によっている。
- (7) いうまでもないことだが、ここにおける宇宙とはキリスト教的な世界観であり、近代の自然科学的な宇宙観とは異なるものである。

引用文献

Atkinson, J.W. 1964 An introduction to motivation. Van Nostrand.

- Barrett, E.B. 1911 Motive force and motivation tracks: A research in will psychology. Longmans, Green.
- Danziger, K. 1997 Naming the mind : how psychology found its language. Sage. 河野哲也（監訳）心を名づけること：心理学の社会的構成（上・下）勁草書房
- Gardiner, H.M. Metcalf. R.C. and Beebe-Center, J.G. 1937 Feeling and emotion: a history of theories. American Book Company. 矢田部達郎・秋重義治（訳）1964 感情心理学史 理想社
- 宇津木成介 2015 感情の概念を巡って—用語の歴史的検討の試み—感情心理学研究, 22, 75-82.
- Woodworth, R.S. 1918 Dynamic Psychoogy. Columbia University Press.